

でも子どもたちのためにできる福祉教育を



地域のおっちゃん・おばちゃんの等身大の活動を伝える

「これまで培ってきた
基盤を生かして」

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）により、先行きが不透明な状況が続き、地域福祉活動にも大きな影響を与えています。

一方で、府内の市町村社協ではコロナ禍においても、これまでの基盤を生かし、地域住民やボランティア、学校や福祉施設と連携して、子どもたちに学ぶ機会を提供する取り組みをしています。

今回は、コロナ禍での子どもへの学びをテーマに、「今しかできないこと、今だからこそできること」と、試行錯誤や創意工夫しながら進めている「とまらない愛」福祉教育の実践について紹介します。

「芝谷中学福祉学習会」の 実践とプロセス 「コロナ禍の学校とのつながりづくり」

地域の福祉課題を知る

高槻市の芝谷中学校では、総合学習の一環として、平成26年から地域福祉学習会を行っています。福祉への興味・関心を生徒だけではなく保護者にももってもらうため、学習会のみでの発表会を参観日にあわせて実施しています。

学習会では、社協や学校、地区福祉委員会、民間社会福祉施設連絡会や行政等（以下、参加団体）が協力・企画し、ひとり暮らし高齢者のお食事会や子育てサロンが居場所づくりにつながっていることなどを紹介。自分たちの町の「過去・現在・未来」を考え、地域で支えあう必要性や福祉への関心を深められるように実施しています。また、参加団体が、普段からの福祉学習を通じて顔見知りになることで、相互理解や連携の強化につながっています。

生徒のまっすぐな気持ちを受け止める！ 福祉の疑問を感動に変える福祉教育！



高槻市社協
イメージキャラクター
タッピー

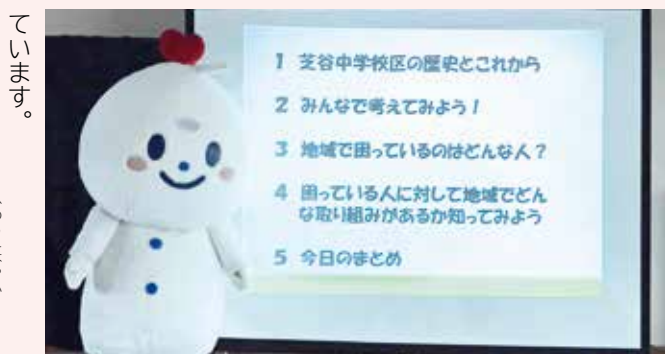
高槻市社協

あきらめない

「コロナで授業が遅れ、外出自粛の要請が出た時期でしたが、参加団体が「丸となり」と、講義をできることをやろう」と、講義をDVD化し教材として活用しました。個人ワークでは、困っている人のイラストを見て、何に困っているかを当事者の視点にたって考えられるようにし、地区福祉委員会や社協を紹介しました。参加団体が納得のいくまで打ち合わせを重ね、内容を企画。動画撮影・編集は、社協が担当しました。地区福祉委員会の大橋公美子さんは、「あきらめそうになったときに、熱い思いをもった参加団体や先生方がいてくださったことが支えになり、やりきることができた」と活動を振り返りました。

「みんな」で 福祉の心を育む

生徒からは、「知らないところで、みんなに支えてもらっていることがわかった」「地域の人と困った時に助け合う」という声が寄せられ、自分から困っている人に手を差し伸べられる「福祉の心」を育む一歩につながった。



- 1 芝谷中学校区の歴史とこれから
- 2 みんなで考えてみよう！
- 3 地域で困っているのはどんな人？
- 4 困っている人に対して地域でどんな取り組みがあるか知ってみよう
- 5 今日のまとめ

高槻市社協の樋上遥香さん（ひのうえはるか）は、「福祉の疑問を投げかけ、自分のこととして考えてもらうことで、福祉に感動し、興味をもってもらえるきっかけになれば」と話します。

長い目で見て、みんなが地域を育てていくこと。学習会後に中学生が書いたコロナ喚起のチラシを、地区福祉委員の協力のもと地区内公民館・自治会・医院などに掲示するなど関係が深まっています。

「とまらな愛、大阪！」

特集

コロナ禍で

米作りで育む

豊かな心と郷土愛

「地域で学び、地域へ返す」

交野市社協

新たな可能性 「福祉教育×農業」

交野小学校区福祉委員会で、交野市立交野小学校の5年生を対象に、田植え・稲刈りを体験する福祉教育を行っています。

この取り組みは、校区に農業関係者が多いという特色から生まれました。

体験をとおして、子どもたちが地域住民と交流することで、地域の人から大切に思われていることを実感し、自分も地域の一員であることに気づくというねらいがあります。

地域の人が先生となり、子どもたちに米作りや田んぼで出会った生きもの（ジャンボトナリ、オケラ、ミミズなど）のことを教えることで世代間交流も生まれます。また、この経験から地元産物やそこに携わる人を知り、郷土愛が育まれる場にもなっています。

記憶に残る体験を

令和2年度はコロナの影響で



「地域で学び、地域へ返す」ことのできる力をながい目で育てる



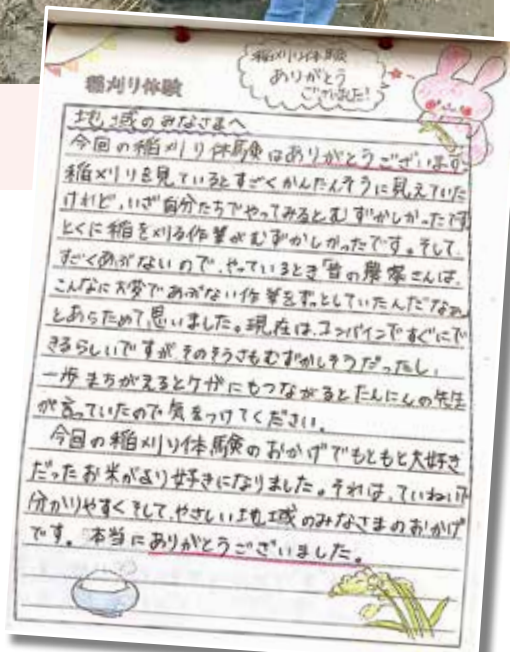
田植えは中止。稲刈りも手刈りは半分まで、残りは「コンバインで刈り取るなど規模を縮小して行われました。」「コロナで行事がのきなみ中止になるなか、何か子どもたちに体験させてあげたかった。中止にするのは簡単だが学校としてどう工夫すれば体験できるかを考えた」と、高寄育校長は語ります。

校長の思いは通じ、生徒からは「地域の人にやさしくしてもらいます」「うれしかった」「一生記憶に残る体験だった」などの感想が寄せられました。「子どもたちのよるこが声が活動の励みになる」と、校区福祉委員の藤林大さんはうれしそうに笑いました。

未来への種まき

交野市社協舟山鮎子さんは「子どもたちが将来、この経験を思い出し、地域のために行動してくれたらうれしい」と、未来への期待を語りました。

地域と社協と学校の協働実践をとおして、「世代間交流」「郷土を愛する心の醸成」「地域で学び、地域へ返せる力の育成」などをめざすこの取り組みは、「コロナ禍における福祉教育の新たなひろがりといえます。」



これらの実践に共通することは、活動者の子もまたちへの思いや願いがその原動力となっていることです。

そこには「できないではなく、何ができるか」を身近で考える学校の先生がいて、学校を取り巻く地域には、そうした声を受け止め、「あきらめない」と一緒に悩んでくれる地域のみなさんがいます。そして、普段から地元のことをよく知る社協の担当者が気もちに寄り添い、実践を支えています。

各地で広がる大阪の「とまらな愛」福祉教育は、これからもさまざまな人たちとの思いを重ねながら、明日へとつながっていきます。

大阪府内の市町村社協の7つの福祉教育の取り組みはボランティアセンターのホームページにも掲載しています。

